

14－16 世紀ロンドンのミンストレルに関する史料調査	
上野未央	比較社会文化学専攻
期間	2006 年 2 月 2 日～2 月 13 日
場所	イギリス ロンドン
施設	イギリス国立公文書館、 ロンドン市立公文書館、 ロンドン大学歴史学 研究所図書館、 ロンドン大学図書館 Senate House Library、 ロンドン大 学ユニヴァーシティ・カレッジ、 ギルドホール図書館、 大英図書館

## 内容報告

### 1. 海外調査研究の必要性・目的

ミンストレル(minstrel)とは、中世から近世のイングランドで、俗人向けの音楽を担っていた音楽家・芸人の総称である。彼らは、国王、貴族、都市、ギルド、フラタニティなどに雇用され、主に祝宴で、音楽を演奏したり、芸を披露していた。

私は、様々な社会階層の人々から雇用されていたミンストレルを研究対象とすることで、中世から近世イングランドにおいて世俗の人々の有した文化の諸相を浮かび上がらせることをめざし、研究を行ってきた。さらに、中世後期から近世初期という、イングランドの政治制度が大きく変動した時代を取り上げることで、イングランドの大きな政治的枠組みの変化が、世俗文化のレベルにどのような影響を与えたのかを考察したいと考えている。

先行研究は、国王の専属であったミンストレルについてはある程度明らかにしてきている。支払い記録から、雇用されたミンストレルの名前や活動内容、彼らにいくら支払われていたかなどについての情報が得られるためである。また、15 世紀半ばに作られた国王のミンストレルのギルドに関しても、いくつかの研究がある。

また、16 世紀後半以降のロンドンにおけるミンストレルについては、演劇史の分野で、最近、いくつかの研究結果が発表されてきている。しかし 16 世紀以前にロンドンで活動したミンストレルについては、ほとんど研究が行われてきていない。さらに、中世

ロンドンの音楽に関する研究でも、主に教会音楽とその担い手たちにのみ関心が集中した結果、世俗向けの音楽に携わった人々については、ほとんど研究されていない。

以上のことから、14～16 世紀のロンドンにおけるミンストレル関係の史料は、まとめられてきておらず、多くは未刊行のまま、各資料館に散在している。そのため、現地イギリスでの史料収集は不可欠である。

世俗文化の担い手としてのミンストレル研究の一環として、2004 年 9 月から 2005 年 9 月まで、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ(UCL)の中世学(Medieval Studies)の修士課程(MA)に在籍し、修士論文のテーマとして、ミンストレルの遺言書を取り上げ、分析した。史料として、ギルドホール図書館とイギリス国立公文書館に収められている未刊行の一次史料（14 世紀末から 16 世紀半ばに作成された 23 通のミンストレルの遺言書と 2 通の埋葬記録）を用いた。ロンドン大学では、これらの遺言書史料の解読・分析を行った\*1。

ロンドン大学での修士論文作成に際し、先行研究を整理する中で、16 世紀のロンドン市議会の記録中に、ミンストレルのギルドに関するものが現存することを知った。

ロンドンにおけるミンストレルのギルドの記録として最古のものは、イギリス国立公文書館に現存する、1350 年に結成されたとされるミンストレルのフ

ラタニティの存在を示す史料である。しかし、このフラタニティに関する史料は、これ以外には現存しない。そして、1500 年になるまで、minstrels のギルドの存在を裏付ける史料は見つかっていない。1350 年に作成されたフラタニティと、1500 年以降に記録に登場し始める minstrels のギルドとが、同一のものであるかどうかは分からない。しかし、1500 年以降、minstrels のギルドは、しばしばロンドン市の記録に現れ、後に「音楽家のカンパニー」(Company of Musicians)と名前を変え、現在まで続いている。

この minstrels のギルドの記録が多く残り始めた 1500 年という年は、遺言書群の分析からも、minstrels にとって、一つの分岐点であると考えられる。

第一に遺言書からは、14、15 世紀ロンドンの minstrels は、職業集団としてまとまっていたと考えられる。中世ロンドンでは、同業者はある程度まとまって居住することが多かったが、遺言書から分かる minstrels の居住地、埋葬希望地は、ロンドン市内と近郊の教区のあちこちに散らばっている。

第二に、minstrels の遺贈状況をみると、遺言書ではほとんど何の財産にも言及しなかった者から、楽器や宝石、土地や建物を所有していた者までおり、同じ職業に就いていながら、個人によって、経済状況も大きく異なっていたと推察される。また、14、15 世紀の遺言書で、minstrels のギルドに言及したものはない。以上のことから、遺言書群からは、16 世紀以前においては、minstrels たちの間で、ギルドのような互いの結びつきは、それほど重視されていなかったのではないかと考えた。ただし、minstrels たちは、ギルドより小規模なつながりを互いに持っていたと考えられる。家族や使用人に楽器を遺した者、遺言執行者として同業者を任命した minstrels が見られるためである。

一方で、16 世紀になってからの minstrels の遺言書はそれまでとは異なる性質を持っている。1500 年以前に遺言書を遺した minstrels のうち市民を名乗ったのは一名であるのに対し、16 世紀になってから遺言書を遺した minstrels のほとんどが、自らを市民と名乗っている。彼らはおそらく、minstrels のギルドを通じて市民となったのだろう。また、1500 年以降の minstrels の遺言書群には、不

動産に言及しているものが多く、それ以前の人々より、やや裕福な者が多くなっているようである。さらに、一通の遺言書で、minstrels のギルド (brotherhood of minstrels) に言及されている。

このように、ロンドンの minstrels の遺言書群は、15 世紀以前と 16 世紀とで、やや異なる性質を持つ。minstrels と呼ばれた人々の社会的地位・経済的地位の変化と、1500 年以降、史料に登場する minstrels のギルドの存在は、何らかの関わりがあるのではないだろうか。

ロンドン大学に提出した修士論文では、minstrels の遺言書に対象を絞って研究を行ったため、彼らのギルドに関しては、詳しい調査を行うことができなかった。そのため、今回、ロンドン市内の文書館に残る、minstrels のギルドに関わる史料を収集する必要が生じた。

他にも、イギリス公文書館には、minstrels が関わった裁判史料や、土地の譲渡に関する記録などが現存することが、これまでの調査により判明している。これらの史料も未刊行であるため、現地に赴いて調査を行った。

## 2. 調査の概要

第一に、ロンドン市立公文書館に残る、16 世紀前半に作成された minstrels のギルドの記録をマイクロ・フィルムで確認し、複写した。

今回の調査で、ロンドン市立公文書館に 19 世紀の手書きの目録があることが分かった。その目録を確認した結果、minstrels のギルドの記録以外にも、minstrels 個人や、ロンドン市に雇用された芸人だったウェイツ (waits) と呼ばれる人々に関する記事が、ロンドン市議会の記録である、Journal of Common Council および Repertories of the Court of Alderman に収められていることが分かった。そのため、ギルドの記録以外の関連史料もマイクロ・フィルムで確認し、複写した。現在、原文を解読中である。

今回の調査で収集した史料の一部の内容は以下の通りである。

- minstrels のギルドからロンドン市長と市参事会員にあてた請願。ロンドン以外の場所からやってくる minstrels たち (foreign minstrels) から自分たちの職業を守ろうとした。(Journal vol.10, f. 183)

- ロンドンのウェイツからの請願。ミンストレルのギルドに加わり、ギルドを通じて市民になることを希望している。(Journal vol. 10, f. 251)
- ミンストレルのギルドの規約更新。役員名を含む。(Journal vol. 11, f.320)
- ロンドン市のウェイツの給料についての記述。(Journal vol. 12, f. 281)
- ミンストレルと役者(Players)に関する記録。(Journal vol. 16, f. 253)
- ミンストレルのギルドに Livery (お仕着せ、そろいの制服) が支給された記録。[Repertories (Rep.と略記) 1, f. 98]
- 国王のミンストレル、ジョン・チェンバー(John Chambre)が、ロンドン市のミンストレルのギルドのメンバーになる。(Rep. 2, f. 98)
- ミンストレルのギルドの規約が読み上げられ、Journal に記録された。(Rep. 3, f. 187)
- ロンドンのミンストレルで、ウェイツの一人でもあった John Fyth が死亡。(Rep. 3, f. 235)
- ロンドン市当局が、ウェイツのために楽器を購入。(Rep. 7, f. 137)

これらはすべて、1500-1550 年に記録されたものである。これらの史料の中で、特に興味深いのは、国王のミンストレルであったジョン・チェンバーが、ミンストレルのギルドに加わり、のちに役員にまでなっていることを示す史料である。これまでの研究では、国王のミンストレルたちと、ロンドン市で活動していたミンストレルたちとのつながりはほとんどなかったと言われてきた。14～16 世紀の遺言書でも、国王のミンストレルと、都市のミンストレルとのつながりは見られなかった。だが、16 世紀ロンドンで、国王のミンストレルと、都市のミンストレルのギルドとの関わりがあったことが、今回調査した史料から明らかになった。また、ロンドン市当局に雇われ、都市の祝祭・宴会などで音楽を担当したウェイツが、ミンストレルのギルドに入ろうと、請願を起こしていたことも、今回収集した史料から明らかになった。今後、都市で活動したミンストレルと、国王のミンストレルや、ロンドン市専属の音楽家ウェイツとを比較し、それぞれの特徴を明確化したい。

また、今回の調査では、イギリス国立公文書館所蔵の、ミンストレル関連の史料の収集も行った。ロンドンに居住していたミンストレルが関わった裁判

記録や、国王に仕えたミンストレルへの支払い記録などが約 20 の史料に残っていることが、日本における調査で判明していたため、これらの史料の調査を行い、ほぼ全ての関連史料を写真に収めることができた。ギルドホール図書館にも赴き、16 世紀後半に書かれた、ミンストレルの遺言書を写真に収めた。

また、ロンドン大学歴史学研究所(Institute of Historical Research)図書館や、ロンドン大学図書館(Senate House Library)、大英図書館においては、二次文献の収集を行った。歴史学研究所においては、ロンドンの有力ギルドの会計簿、教区教会の会計記録などの刊行史料を調査した。ロンドン大学図書館、大英図書館では、特に、音楽史・演劇史の分野の二次文献を収集した。

さらに、今回の調査期間中、ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校のキャロライン・バロン教授、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジのデイヴィッド・ダヴレイ教授とそれぞれ面会し、情報交換を行った。

### 3. 今後の研究計画、展望

今回行った調査の一部は、ロンドンのミンストレルに関する論文の一部となる。今回の調査期間中に面談したロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校のキャロライン・バロン教授から、ロンドン大学に提出した修士論文を手直しし、イギリスの雑誌 London Journal へ投稿することをすすめられた。現在、ロンドン大学に提出した修士論文に、今回の調査で得られたミンストレルのギルドについての記述を加えた論文を準備中である。

さらに、本調査は、お茶の水女子大学に提出予定の、中世後期イングランドの俗語歌謡(キャロル)についての博士論文の一部となる予定である。

私は、修士課程在学中から中世後期イングランドの世俗文化に関心を持ち、キャロルを収めた写本に注目してきた。2000 年 10 月からの 1 年間、大学間交流による留学生として、オックスフォード大学に留学し、キャロルを収めた写本である、ボードリアン図書館所蔵の 15 世紀の一写本(MS. Eng. poet. e.1. e.1 写本と略記)について研究した。以来、当該写本に注目し、2003 年 7 月には、英国リーズ大学で行われた国際中世学会(International Medieval Congress)において e.1 写本の史料学的分析に的を絞った口頭報告を行った<sup>\*2</sup>。史料学的分析に加えて類似写本群と

の比較を行った論文も 2004 年に発表した。また、当該写本のキャロルのテキスト分析も行ってきた\*3。これまで分析してきた e.1 写本に収められたキャロル群は、聖職者によって、俗人も含む聴衆に向けて歌われたものであったと推察される。したがって、これまででは、キャロルのテキスト分析を通して、聖職者が世俗の人々と共有しようとした様々なイメージを、明らかにしようと試みてきた。

しかしながら、世俗文化の諸相をより具体的に明らかにするためには、俗語歌謡に描かれたイメージだけではなく、実際に世俗文化が楽しまれた場について明らかにする必要があると考えるにいたった。そのため先述のように、2004 年 9 月からロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジに留学し、14 世紀から 16 世紀にロンドンで活動した minstrels の遺言書群を分析した。遺言書群の分析に加え、今回の調査で、16 世紀ロンドンの minstrels のギルドに関する史料を入手することができたので、今後は、15 世紀から 16 世紀にかけてのロンドンにおける minstrels の社会的地位の変化について考察を加え、博士論文の一部としてまとめる。

さらに、今回収集した二次文献を用いて、今後、教会音楽と世俗音楽との関係や、ロンドンで活動した minstrels と国王の minstrels との関係について明確化していきたい。

---

注

\*1. Mio Ueno 'Wills of Minstrels in London, 1393-1558', MA dissertation, University College London, September 2005.

\*2. Mio Ueno 'An Historical Survey on MS. Eng. poet. e.1', in *Associations and Identities in Medieval England: Session Proceedings of International Medieval Congress University Leeds*, ed. by B. Dobson and H. Tsurushima (2004), pp. 1-8.

\*3. 上野未央「十五世紀イングランドのキャロルにみる既婚女性のイメージ」『F-Gens ジャーナル』2 (2004 年 9 月)、123-8 頁；「十五世紀のキャロル写本 MS. Eng. poet. e.1 に関する史料論的研究」『お茶の水史学』47 (2003 年 10 月)、1-38 頁；口頭報告「中世後期イングランドの聖母マリア像—キャロル写本を中心として—」日本西洋史学会第 53 回大会、愛知県立大学、2003 年 5 月 10-12 日。

うえの みお／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学  
Mion126@aol.com

---

教員のコメント

現在博士論文執筆中の上野未央さんが行っている研究は、ヨーロッパ社会が中世から近世へと移行したとされる時期に、実際には何が変わり何が変わらなかったのかを、世俗文化の側面から明らかにしていこうという意欲的なものです。歴史学の範疇だけにとどまらず、中世英文学、中世音楽学など幅広い知識も援用して、多岐にわたる史料を読み解いてゆく点も上野さんの研究の特徴としてあげられます。本海外調査研究のおかげで、中世の音楽に関わる人々がのこした史料のテキスト分析から一歩進んで、それら史料を残した人々の活動に関する広範な史料が調査可能になりました。今回の史料調査によって、ロンドンという大都市が、国王を頂点とする政治体制に組み込まれていくなかで、国王お抱えの音楽家達の変化というミクロな視点からその一端を具体的に明らかに出来る可能性が出てきたことは大変喜ばしく、博士論文に結実することを心から期待しております。

(人間文化研究科 助教授 新井 由紀夫)